

## 地名の由来

宇宙にある一切の物体・現象・精神作用を司る十二の神を祀ったことによると言われていますが、この他に森が十二町歩（12ha）の広さのため等の諸説があり、確かなことはわかりません。

## 森の特徴

十二天の森は、中央アルプスの空木岳（2,864m）に発する中田切川がつくった扇状地の上にあります。市街地にありながら、かつての伊那谷の平地林の特徴を残しています。この貴重な森には、30～80年生の針葉樹や広葉樹が混成し、これまでに150種類の植物が確認されています。

この森には、年間を通して地下水が湧き出て、ところどころに湿地帯があります。このような湿地帯は中央アルプス山麓部にはいくつもありますが、市街地で見ることができるのは、伊那谷ではこの森だけです。



湿地帯



ザゼンソウ

このように、森には良好な環境が形成されているので、四季を通じて多くの草花が育生し、湿地帯にはゼンソウの群落をはじめ、ミズゴケといった貴重な植物を見ることができます。

そしてチョウをはじめとするさまざまな昆虫や野鳥も多く観察できます。特に冬にはカルガモ・マガモなどの水鳥が池に多く飛来します。



十二天の池(旧上の堤)

## 森を守る活動

森の環境保全活動は、主として地元住民のみなさんによるボランティア活動に支えられています。

福岡区住民による「十二天の森を守る会」は、約80名の会員が、巡視・雑草刈り・丸木橋の修理・小鳥の巣箱設置や補修などの活動を、年間にわたり活発に行っています。また、隣接する駒ヶ根工業高校のみなさんも、ゴミ拾いをはじめ、工業高校ならではの植物の名札づくり等の活動を行っています。

今後は地元区のみなさんだけでなく、多くの市民で森を守っていく活動を行うことが大切になります。

### 自然保護につとめましょう!

～公共マナーを守って森林浴・観察を楽しみましょう～

どなたでもお気軽に森に入り、散策や動植物の観察をしていただけます。公共マナーを守ってお楽しみください。

- ◆ゴミは持ち帰りましょう
- ◆動植物の採取はできません
- ◆池での釣りは危険なため禁止です
- ◆森全域が「県鳥獣保護区」に指定されています
- ◆火気（たばこ・たきびなど）厳禁です
- ◆バイクの乗り入れは禁止です
- ◆池へ外来種の持ち込みは禁止です
- ◆駐車場脇のトイレは、みんなで気持ちよく使いましょう

所在地	駒ヶ根市赤穂8776-1ほか(駒ヶ根市福岡区)
総面積	107,791㎡(東京ドーム約2.3個分)
池満水面積	5,000㎡(農業用ため池施設台帳による)
標高	690～706m
所有者	駒ヶ根市
管理者	駒ヶ根市教育委員会 担当:社会教育課生涯学習係
お問い合わせ	駒ヶ根市赤須町20-1 TEL0265-83-2111(市役所内線721番)

**【電車】**  
JR飯田線伊那福岡駅より徒歩15分

**【自動車】**  
中央道駒ヶ根ICより車15分

**【森駐車場】**  
普通車8台



# 森と語りろう

自然生態観察・生涯学習の場

## 駒ヶ根市 十二天の森

## じゅうにてん もり 「十二天の森」の概要

### 設置の目的

駒ヶ根市は、市街地に残された貴重な平地林を将来にわたって保全し、市民の自然保護意識の高揚と生涯学習に資するため、十二天の森を「自然生態観察・生涯学習の場」として指定し、整備活用を行っています。

### 森の歴史

かつては、十二天の森周辺や駒ヶ根工業高校の敷地を含めた一帯が「十二天（十二天山）」と呼ばれていました。この一帯は、県下有数の豪農であった福澤家（家号「福岡西」）の所有で、昭和17年（1942）に時の当主であった福澤憲和翁により、駒ヶ根工業高校の敷地が無償提供されました。その後、終戦に伴う農地改革により、周辺の土地は地元農家に解放され、さらに昭和の末から平成にかけて、工場や民家に割譲されました。

この一帯は、大正の終わり頃まではアカマツを主体とした林であり、毎年晩秋になると地元住民に開放されていました。人々はそこで、かまどで火を焚くための松葉や枯枝を採集していました。その後、昭和30年代までは、クヌギやコナラの林として生活に必要な炭を焼いていました。今でもところどころに直径2mほどの炭焼きをした穴の跡があります。

森の中には「上の堤」「下の堤」と呼ばれていた溜め池があり、水田の灌漑や生活用水として利用されていました。往時の上の堤は、子ども達の恰好の水泳場だったようです。下の堤では、冷凍用氷の切り出しもされていましたが、昭和20年代末から30年代はじめにかけて、市道の改修工事によりなくなりました。現在も「十二天の池」として残っている上の堤は、天明5年（1785）に造られ、昭和35年（1960）に改修工事がされましたが、現在は溜め池としての利用はしていません。

森の北東には、お薬師様と呼ばれた「薬師如来」を祀った祠がありました。ここでは、毎年5月に福澤家の例祭が行われ、弓の余興や露店が出るなどの華やかさでした。しかし戦争により途絶え、如来は光前寺に移されて祠もなくなりました。現在、祠のあった場所は民有地となっています。

森付近からは縄文時代後期の土器が出土し、「十二天式土器」と呼ばれています。

## 断層が走る

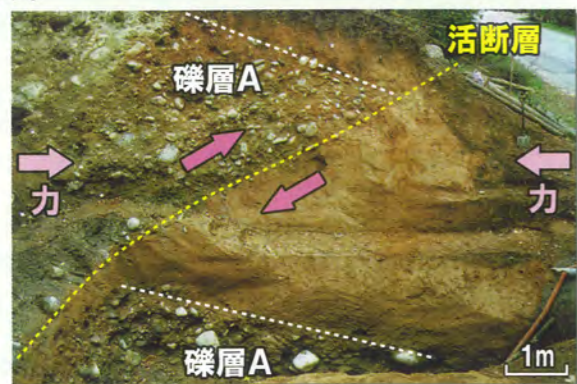
森の東側を南北に通る道路（市道南割福岡線）の脇には、ちよつとした崖が続いています。この崖は、伊那谷有数の田切断層によってできたものです。この断層は、伊那市南部から中川村まで、全長約20kmも続いています。この断層崖を境にして西側が6mほど持ち上がっています。そのため、駐車場から森の中に入ろうとすると、坂を上ることになります。

この断層を観察できる観察場所を、道路沿いに設けてあります。ここでは、伊那谷の地形のでき方や地震と活断層の関係を考える上で貴重な場所です。

十二天の森の大地には、45kmほど離れた木曾御嶽山から飛んできた火山灰が降り積もり、年月を経て赤土の層となっています。断層露頭をよく観察すると、この赤土の層に中田切川から運ばれてきた礫層がのしあがっています。この赤土には2万6千年前の九州南部の火山から飛んできた火山灰も含まれているので、田切断層はそれより後にできたということがわかります。このような比較的新しい時代にできた断層を活断層と呼んでいます。

活断層である田切断層は、これまでに何度も地震を伴う活動を繰り返し起こしてきました。伊那谷には、東西から押しつけ合う大きな力が働いています。その力により大地は動き、今でも中央アルプスは年間数ミリずつ上昇しています。今、私たちが目にしている中央アルプスは、80万年以上という果てしない年月を経て、現在の姿になっています。

なお、この断層崖に沿って通る東側の道路は、かつては旧上穂村を南北に通る主要道でした。当時は土木機械がなかったため、断層崖の下に道をつくるのが容易だったのです。



【断層露頭観察場所】平成6年（1994）設置  
伊那谷自然友の会・東京大学地震研究所／掘削トレンチ調査

